



▼世界俳句2008 第4号
▼夏石香矢・世界俳句協会
編 かつて衝撃的な第一句集
『狹帯記』をもって、高柳重
信の、あるいは安井浩司の若
き継承者と目された俳人・夏
石香矢は、当然のように俳壇
的な世界と一線を画しながら
ら、その後も精力的な活動を
続けている。前代未聞の俳句
ブームに乗って俳句の国際化
といったムーブメントも起き
ているなか、しかしそういつ
た平板な位相ではない独自の
「世界俳句」というものを指
向して、夏石は、二〇〇〇年
九月に世界俳句協会を設立し
た。わたしの記憶に間違いな

ければ、夏石は学際的な場所
では確かに比較文学が専門領域
のはずだ。日本固有の俳句表
現を、世界的な詩表現と比較
考していくのは必然的なこと
だったに違いない。世界俳句
協会誌として〇四年十一月に
創刊され、本集で第四号に達
した。内外の百五十人以上の
俳人の作品とジュニア俳句作
品が収載されている。
夏石は「世界俳句の未来
と題して論議のなかで次の様
に述べている。
「その起源において、詩は
神話や説話よりも短かった。
日本神話で、最も目覚ましい英
雄は、スサノオとヤマトタケ
ルであり、両者とも短詩を詠
んでいます。(略)とりわけ、
ヤマトタケルは、筑波の道
すなわち俳句の道の創始者と
して考えられます。」
短歌は、和歌へと遡及し、
その淵源を求め、時間性のも
つ豊饒さによって、俳句との
差異化を図る場合がある。歌
会始めとした祭儀は、あなが
も短歌が天皇制の詩型となっ
ていることの証左であり、そ
れが表現水位を保持すること
になるのならば、必ずしも
もそうではない。短歌も俳句
も「短詩」として括るなら、
夏石がいうように、なにも予
規以降の近代俳句をその始ま
りとする必要もないし、芭蕉
をもつてその始祖とする必要
もない。夏石が提示するよう
に記紀神話の豊饒な歌謡世界
へと淵源を求めるとは否定
するものではない。保田與重
郎は、芭蕉のなかに記紀神話
の影響が色濃くあると捉えて
いたし、俳句表現を拡張した
時間性に置き換えて見直すこ
とは、現況の弛緩した俳壇情
況を考えれば、必要なことの
ように思われる。夏石は、こ
うも述べている。
「私の最高の喜びは、日本
からのみならず、海外からの
詩として豊かな俳句を詠んだ
り歌した詩人の存在であり、
最低の悲しみは、詩として貧
しい俳句を受け取ることとし
た。(傍点は引用者)
外野席からは、俳句を詩と
して捉えるなら詩を書けばい
いじゃないかと声がかかりそ
うだが、それは転倒している
いい方だ。江戸期の漢詩が知
識の披瀝の象徴だったことを
考えれば、わたしたちがいま
考えている「詩」のかたちの
相型は、西欧や大陸からの移
入である。オリジンなものほ
詩を拡張した表現として見做
すことから始めるべきだ。詩
形式の表現だけがポエジーを
有しているわけではないし、
短歌も俳句もすべて詩性(あ
るいは詩魂)を包含している
のだ。
夏石が、世界俳句へとその
指向を定めたのは、あまりに
「詩として貧しい俳句」が俳
壇という狭量な場所を跋扈し
ているからだと思う。(M)
・1・30刊、A5判二三〇頁
・本体一六〇〇円・七月堂